

論文の要旨

本論文は、明代に大量に刊行された日用類書、つまり家庭用百科全書の内容を精査することにより、その系統を明らかにするとともに、日用類書をはじめとする実用書を通して、明代当時の通俗文学受容の実態を解明しようとするものである。ここでいう通俗文学とは、高等教育を受けていない下級知識人層が編集・出版に携わることが多かった白話小説などのことであり、明代に出版された実用書も基本的には同様の背景を持つ人々によって出版され、また利用されてきた。実用書と通俗文学の関係性を追究することは、当時の社会における資料収集と創作活動との関係を解明することにつながる。そして、世界でも最も早く出版の大衆化が進展した中国における大衆出版と実用書・小説制作の実態を明らかにすることは、大衆社会の成立と出版の関わりについて考察する上で、重要なモデルケースを提供するものと認められる。

この方面については、小川陽一氏らの先行研究が存在する。しかし、日用類書間の内容面における具体的な関係性が明らかになっていないこと、対象とした白話小説の範囲が限定されていること、白話小説や民間芸能が日用類書に与えた影響という視点が欠けていることなどの問題がある。

以上のような背景から、本論文では、特に当時影響の大きかった実用書の内容を利用して編集されたと見られる日用類書を研究の中心に据え、文学の形式や故事を利用して教育の材料とした覚え歌である歌訣や、白話小説・雑劇などの文学作品との関係について検討を行うことで、明代における文学と実用書の相互関係を解明することを目指す。

具体的な方法としては、(1) 日用類書を含む実用書の調査、(2) 日用類書及び関連分野の実用書と白話小説の内容比較、以上の二つを中心とし、内容的には、法律と武芸の二分野を中心とする。法律分野については、明代の法律に関連する実用書が数多く残っており、また先行研究が存在するため、日用類書の構成方法について検討する上で適しているものと認められる。また武芸分野は、白話小説や民間芸能との関係が深いものと推測され、また先行研究がほとんどないため、この分野の実用書についての整理は、特に『水滸伝』などの武芸者や侠客を主人公とする白話小説の研究において重要な課題であると考えられる。

第一部と第二部では、日用類書の中でも法律に関する部門である律例・律法門を中心として取り上げる。第一部「『金科一誠賦』注に見る明代日用類書の構成方法について」では、法律関係の実用書や日用類書律例門・律法門及び白話小説『律條公案』に収録される覚え歌「金科一誠賦」に着目し、本文及び注の比較を行い、日用類書に掲載される本文の選択方法、並びに本文の加工編集について考察する。第二部「明代後期日用類書律例・律法門の関係について」では、複数の日用類書律例門・律法門について、掲載内容の比較を行い、それぞれの本文の系統、並びに明代当時の日用類書の編集方法について検討を行なう。

第三部と第四部では、武芸に関する内容を収録する部門である武備・演武門を対象とする。まず第三部「明代後期日用類書武備門の構成」では、武備門を持つ明代日用類書と構成・内容及びその出典について、武芸書や小説などと比較しながら概観し、その中でも特に注目に値す

る三種類の日用類書について、その構成を比較する。第四部『飛龍全傳』と武術描写—白話小説と武芸書の交点』では、第三部の内容を踏まえ、白話小説における戦闘描写と武芸書の関係について考察を行う。

これらの検討の結果、得られた結論は以下の通りである。

明代の日用類書は、出版当時に最も影響力のあった書籍から内容を引用している可能性が高く、その中には、『事林廣記』等の前代の日用類書のほか、通俗的法律書や訟師秘本（裁判用マニュアル）、各種の実践的武芸書などの専門書が含まれている。しかしその一方で、出版当時には影響力が強くとも、現代には残りにくかった書籍の内容をも保存している可能性を有しており、実際に第二部で取り扱ったような武芸に関する内容の歌訣は、他書籍に見当たらないか、掲載していても付録のような扱いでしか残っていない。しかしそのような歌訣が、白話小説における描写として採用される例があることは、日用類書と白話小説の関係を示すものとして重要な意義を持つ。また、武芸書と白話小説は、武芸書が白話小説から登場人物を武芸の技などの名称として取り込み、一方で白話小説は武芸書から戦闘描写の表現を取り込むという相互的な関係にあり、両者はフィードバックを繰り返していたものと思われる。

また、日用類書の内容は基本的に先に刊行されたものを踏襲するが、日常生活に関わる情報を掲載するというその性質上、それぞれに地域性・時代性を持つことはままたと見られる。日用類書が典拠とした実用書についても同じことが言える。また、同一の書坊が出版した複数の日用類書の間においては、内容が共通する場合と、受容の変化に応じて大幅に変化する場合の双方が認められる。原拠の利用の仕方はかなり杜撰であり、内容を理解せずに引いている場合も認められる。このことは、書坊が日用類書を作る手法が、既存の文章を無批判につなぎ合わせるというものであったこと、しかし読者の需要に応じて配慮するという側面も持っていたことを示すものである。

日用類書を含む実用書の中に、民間芸能や白話小説などの影響が見られるということは、それだけ人々の文化生活に、それらの白話文芸が浸透していたことを示す。またそのような文化生活を背景として生み出される創作物の中にも、白話文芸と関わりのある実用書が影響を与えた可能性は高い。それを可能にしたのが明代の出版業の隆盛であり、下級知識人の台頭であり、娯楽読書をたしなむ識字層の増加であった。

識字層が増え、出版業が盛んになり、創作のための資料が入手しやすくなり、娯楽のための読書が一般化することは、文字で書かれた読むための作品を創作する者、それを楽しむ者の双方が増加することを意味する。この事実を具体的な形で示すのが文学と実用書の影響関係である。明代にはすでに、今日の情報社会の原型となるマスメディアと読者の関係が成立しつつあったのである。